

# 全国ボッチャ選抜甲子園 競技規則

## 第1条 原則

ボッチャの競技を行う際の心構えは、敵・味方に関係なくよいプレーは賞賛し、ミスを責めるような言動は、選手・観客・指導者全てにおいて控えること。また、賞賛する場合を除いて、静粛に観戦することが望ましい。

## 第2条 競技場

### 第1項 競技場の条件

競技場の表面は、平坦でなめらかであること。

### 第2項 コート

- (1) コートの寸法は、12.5m×6m である。
- (2) コートのラインテープは、外側のライン、投球ライン、Vラインには4cm 幅のテープを使用し、投球エリア内を区切るラインとクロスは 2cm 幅を使用する。
- (3) ターゲットボックスの規定サイズ:長さ 25cm で、幅 2cm のラインテープを使用してクロスを作成し、その外側に内寸で 25cm となる正方形を作成する。

## 第3条 用具

### 第1項 ボッチャボール

- (1) ボッチャボールは、赤色ボール6個、青色ボール6個、白色のジャックボール1個で構成される。  
ボッチャボールの大きさの基準は以下の通り。  
重量:275g±12g  
周長:270mm±8mm
- (2) 大きさ、重さの基準に準じていれば、競技に個人のボールを使用することができる。また、大会主催者が用意するボールを使用することもできる。

### 第2項 投球補助具(ランプ)

- (1) ランプは、付属品、延長部、基本部分を含めて最大最長の状態にして横に倒したときに、2.5m×1m のエリア内に収まるような寸法でなければならない。
- (2) ランプは、ボールを投げることのできない選手が、勾配を用いてボールをコートに送ることを目的としたものであり、加速や減速をする機器、照準器をつけてはならない。
- (3) ランプは、スポーツアシスタントを要して投球する区分の選手が使用する用具であり、投球をする際にはボールに触れたり、押したり自分自身でモーションをおこななければならない。そのため投球に機械的な補助を設ける機器(スイッチで自動投球する機器、ジョイスティックでランプの方向を決める機器等)をつけてはならない。
- (4) ランプは上記(1)～(3)の条件をもと、選手が準備したものを使用する。

### 第3項 その他の用具

選手が競技を行う際に使用する用具は、あくまで自分の力で投球をするための器具である。そのためグローブや棒などが大会の使用に適しているかどうかについては、器具を検査し、適正であることを大会主催者から了承されていること。

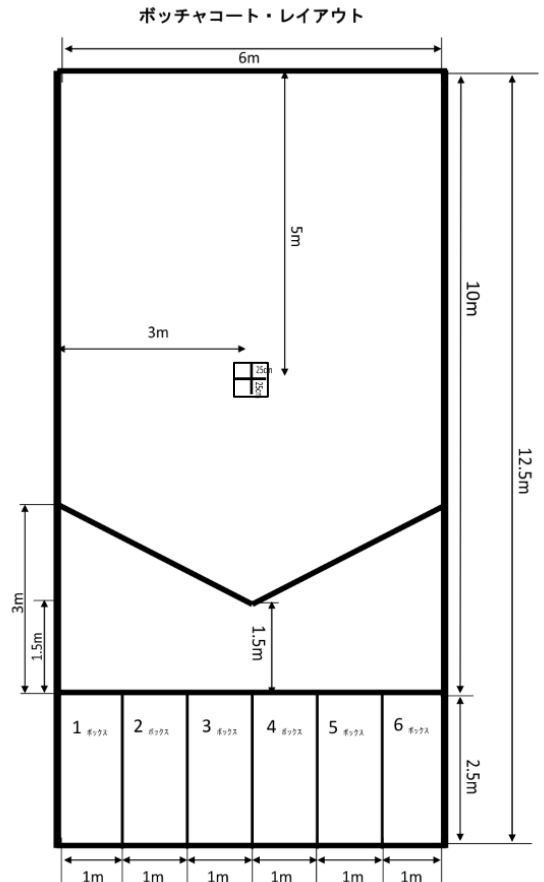
## 第4条 選手

### 第1項 ボッチャの選手

ボッチャの選手は、肢体不自由者を原則とする。

### 第2項 ボッチャの障害区分

ボッチャの障害区分は、すべて投球時の姿勢を基準とする。



(1) 車椅子使用者・座位者

- (ア) 四肢麻痺者、対麻痺者、片麻痺者等、車椅子または椅子座位で競技をする選手。
- (イ) 投球はできるが車椅子の方向を変えたり、移動したりすることが機能的に困難な選手。
- (ウ) 投球することが困難で、ランプを使用して競技する選手。

※(イ)及び(ウ)の選手は、1選手に1人スポーツアシスタントが認められる。

(2) 立位者

立位で競技するもの。競技においては、日常的に車椅子を使用している者でも、投球時に立っているかどうかで判断される。

**第3項 スポーツアシスタント**

- (1) 車椅子使用者のうち、移動したり、方向を変えたりすることが機能的に困難な選手及びランプを使用する選手1名につき1名のスポーツアシスタントが認められる。
- (2) スポーツアシスタントは移動すること、方向を変えること、投球することに対して支援の必要があって、選手の意思を離れて競技に介入することはできない。スポーツアシスタントが選手の意思を離れて競技に介入していると審判及び大会主催者が判断する場合は、反則行為として罰則を受ける。

**第5条 試合方法**

全国ボッチャ選抜甲子園は、すべて団体戦で行われる。また、試合は全て男女の区別なく行われる。

**第1項 チームの構成**

試合は、3人1組で構成されたチームにて行われる。構成されるチームには、試合中いかなる場面でも、車椅子の選手が最低1名は出場していなければならない。また、1名は主将として腕章を装着して試合を行う。

**第2項 コーチ**

試合に出場するチームには、コーチを1名配置することができる。コーチはエンドとエンドの間に選手に指示を出したり、審判に選手交代を要求したりすることができる。

**第3項 控え選手**

各チームは、試合に出場する3人1組に加え、控え選手を1名まで用意することができる。控え選手はエンドとエンドの間に交代することができる。ただし、コートには必ず車椅子の選手がいなければならない(交代をしてコートの外に出た選手はもう一度コートに戻る事はできない)。

**第6条 競技手順**

競技は、以下のような手順で進められる。

(1) 競技の準備

競技を開始するにあたって、審判の指示のもと主将は、選手のうちの選手が最初の段階で競技をするのか、補欠が誰であるのかを申告する。次にコイントスにて投球順序(使用するボールの色)がどちらとなるかを決定する。

(2) ボールの準備

選手は、どちらのチームも自分たちが使用する色のボールを、補欠も含めて2つずつ、合計8つまで持って試合に臨むことができる。また、ジャックボールは各チームに1つだけ用意することができる。これより多いボールを試合に持ちこんではならない。

(3) 投球位置への配置

選手は競技を始める際に審判に誘導を受けながら投球位置に配置される。投球位置は、コートに向かって左から、赤、青、赤、青、赤、青の順で投球ボックスに配置される。

なお、コーチ及び補欠選手は、投球ボックスから遠い位置のコート外に配置される。

(4) 投球練習

試合を始める前に、各チーム6球の自ボールと、1球のジャックを2分以内で投球練習することができる。ジャックボールはチーム内の誰が投げてもよい。自ボール6球と、1球のジャックを全て投げ切るか、2分が経過したとき、投球練習は終了される。

(5) 試合開始の宣告

審判は、赤、青両チームが投球位置に配置されていることを確認した後に、互いにあいさつを促す。次にジャックを赤チームの主将に手渡し、コート外に出ると「ジャック(プリーズ)」という号令をもって試合の開始を宣告する。

(6) 目標球の投球

赤チームの主将は、審判が試合の開始を宣告した後に、コート内の任意の箇所に投球する。この際、コートを区切るラインを越えたり、Vラインを越えない場合はアウトボールとなり、ジャックの投球権は相手チームに移る。ランプ使用者がジャックを投球する場合は、ジャックを投球する前にランプを左右にしっかりと動かさなければならない。

(7) 第1球目の投球

ジャックをコート内の任意の箇所に投球できた場合、ジャックを投球した選手がそのまま自ボールの第1球を投球する。このとき、第1球目がコートを区切るラインを越えてしまった場合は、同じチームの任意の選手が自ボールをコート内に投球することができるまで投球する。

(8) 第2球目の投球

ジャックを投げたチームが自ボールの第1球目を投球できたら、相手チームの任意の選手が相手ボールの第1球目を投球する。このとき、相手チームの第1球目がコートを区切るラインを越えてしまった場合は、同じチームの任意の選手が色ボールをコート内に投球することができるまで投球する。

(9) 第3球目以降の投球

両チームの色ボールが投球されたら、ジャックに対してより遠い位置に配置されたボールを投球したチームが投球する。ジャックに対しての遠近の配置が入れ替わったとき、投球するチームも入れ替わる。これは、投球するべき手持ちのボールが全て投げ終わるまで行われる。

(10) 各チームの持ち時間

ジャックを含めた各チームの持ち時間の合計は、1エンドあたりそれぞれ5分ずつとする。持ち時間とは、審判が計時に投球するチームを指示してから、投球されたボールが停止する、ないしアウトになるまでの合計を指す。この時間の中であれば、選手はコート内に入ってボールの配置をチェックしたり、選手同士で相談したりすることができる。ただし、コーチやスポーツアシスタントが相談に合流はできない。

なおランプ使用者は、(自分がコートに入ったかどうかに関わらず)投球を再開するには必ずランプスイングを左右にしっかりとしなければならない。

(11) エンドの終了、点数の計算

両チームの投球するべき手持ちのボールが全て投げ終わったとき、審判は試合の終了を宣告する。審判は試合の終了を申告した後、第1エンドの獲得点数の計算を行う。点数の計算の方法は以下の通りとなる。

- ① ジャックに一番近い色ボールを投球したチームが勝利者チームとなり、得点を得る。
- ② 勝利者チームの相手チーム(敗者チーム)で、ジャックにもっとも近いボールを基準とし、そのボールとジャックの距離より内側にある勝利者チームのボールが、全て得点対象となる。
- ③ ジャックに一番近い色ボールが両チームとも同じ距離に配置されている場合、チームに関わらず、そのボールは全て得点の対象となる。

審判が得点の計算が終わったら、選手と観客に試合の点数が宣言される。点数が宣言され、審判に促された後、ランプ使用者のスポーツアシスタントはコート内を見ることができる。ただし、試合の結果に介入する(審判に意見をいう)ことはできない。

(12) エンドとエンドの間

第1エンドから第2エンドに移る間に、ボールは選手の手元に開始時と同じように戻される。

このとき、必要に応じて控え選手との交代をすることができる。ただし、コートには必ず車椅子の選手がいなければならない。

エンドとエンドの間では、選手の必要に応じて水分を補給することはできるが、審判に次エンドの準備

を促されたら、速やかに試合準備を完了しなければならない。また、試合の準備に入ってからランプ使用者のスポーツアシスタントがコート内を見て狙いを定めてから次のエンドを迎えてはならない。

(13) 次エンドの実施

ボールが各選手の手元に戻ったのち、第2エンドが行われる。第2エンドでは、ジャックを青チームの主将に手渡し、以後は第1エンドと同じ手順で行われる。

(14) 勝敗

競技は、2エンドマッチで行われ、2エンド終了時の総得点の高いチームが勝者となる。

(15) 同点時の対応

2エンド終了時に同点だった場合は、コート中央の十字にジャックボールを配置し1球ずつ投球して目標球により近いボールを投球した方を勝者とする(ファイナルショット制度)。この場合の投球順序は、エンド開始前にコイントスで決められ、先に投球するチームのジャックが使用される。ファイナルショットは、主将となる選手が、自分のボックスから投球する。ランプ使用者が投球する場合、投球の前にはしっかりとランプスイングを左右に行ってから投球しなければならない。

(16) 競技の終了

競技が全て終了し勝敗が決したとき、審判は選手に勝敗と得点の確認を図り、承諾サインを得る。承諾サインを得たのち選手は審判に誘導を受けてコートから退出する。

## 第7条 違反行為

以下の違反行為に対しては、違反の内容に応じて審判から罰則の指示を受ける。

(1) ラインを踏んだり、越えた状態で投球する。

→投球したボールは無効となり、アウトボールとなる。さらに全てのボールが投球されたのち、相手チームは1球のペナルティスローができる。

(2) 審判の指示がある前に投球する。または審判の指示のないチームが投球する。

→投球したボールは無効となり、アウトボールとなる。

(3) ランプ使用者が、投球する前にランプスイングをせずに投球する。

→投球したボールは無効となり、アウトボールとなる。

(4) ランプ使用者のスポーツアシスタントが、試合中にコートを見たり、選手に指示をしたり、競技に介入する所作を審判が認めたとき(良いプレーを賞賛するだけならよい)。

→投球場面では、投球したボールは無効となりアウトボールとなり、さらに全てのボールが投球されたのち、相手チームは1球のペナルティスローができる。投球場面以外では、全てのボールが投球されたのち、相手チームは1球のペナルティスローができる。

\* ペナルティスローは、対象の違反に対する罰則1回につき1球が相手チームに与えられる。エンドの全てのボールが投球されたのち、コート中央のターゲットボックスを狙って投球する特別の場面で、全てのボールはコートより除去されて行われる。ターゲットボックスに入れることができたボールは、エンドの勝敗に関わらず1球につき1点、投球したチームに与えられる。ランプ使用者は、ペナルティスローの前には必ずランプスイングを左右にしっかりとしなければならない。

(5) 悪質な違反やスポーツマンとして望ましくない態度がある場合、イエローカードやレッドカードが提示される。イエローカードが同一の大会で2枚出された選手、またはレッドカードが出された選手、コーチは、その時点で以後の同一の大会に出場ができない。

## 第8条 抗議

選手が試合の結果に対して不服とする場合は、試合後の承諾サインを書かずに終える権利を有する。ただし、抗議をする際には必ず問題を感じた時点で審判長を呼び、相談しておかなければならない。試合後、勝敗が決した段階で出された意見は全て採用されない。受け入れられた抗議は、当該試合の審判員と審判長、大会主催者と協議し、妥当と判断された場合は再試合の措置をとる。

## 第9条 その他

競技を行う上で、この規則にない状況があった場合、全て大会主催者の判断が尊重される。